

〈特集〉

小山市迫間田「塚田家資料」の 保存と活用

菱 沼 一 憲

「塚田家資料」は、栃木県小山市迫間田の塚田家に伝来した資料群である。2019年1月、正式に塚田崇氏と委託契約書を取り交わし、本学参考館（本学の博物館施設）へ委託されることとなった。塚田氏によると、資料群は近年の蔵の解体にもなって発見されたそうで、当初は小山市への寄託・保存を希望されたが、市での受け入れは困難とされ、塚田氏が直接、元本学教授鍛代敏雄氏に連絡され相談の上、当時の日本史学科で引き受けさせていただくことになり移送されていた。

本資料については、資料群としての分析はもとより、所蔵者である塚田家や迫間田村など周辺の歴史状況についての調査も未だ端緒についたばかりで公表できる段階ではないが、資料レスキューについての特集を組むにあたり、大学教育の教材として、教育現場でいかに利用されているのかについて事例報告をさせていただく。

本学日本文化学科日本史フィールドは、現在のところ古代・中世・近世・近代・外国史・宗教史の専任教員7名体制で、それぞれ専門ゼミを担当し卒業論文の指導を行っている。2012年の学科再編で、歴史学教育は日本史学科から日本史フィールドへと引き継がれたが、一貫して「古文書実習Ⅰ」「古文書実習Ⅱ」はくずし字を読む科目として開講してきた。また単位を伴わない集中講義として、春セメスター（前期）と、秋セメ

スター(後期)の授業期間終了後の補講期間に、「古文書実習」を毎年2回、2日間にわたり設けて原文書によるくずし字読解の指導をおこなっている。

ことに2010年から翌年にかけての集中講義での「古文書実習」と、2019年の「古文書実習Ⅰ」において、「塚田家資料」を教材とし、その整理と目録の作成を実施した。実施方法は、学生を3～4名のグループに分け、資料を適量配分し、「史料番号」「年月日」「史料内容(件名)」「形状」「数量」「差出・宛先」「備考」という目録項目を埋めて目録を作成し、資料は「史料番号」ごとに一つの封筒に入れ史料番号の順に並べ保管する。およそこのような作業を授業・集中講義にて実施した。集中講義では、授業休止期間であるので、1日、6時間程の作業時間を取り、2日間にわたって20名程度の学生が参加した。

塚田家資料は後述するように近世後期から明治10年代までの史料(文献資料)が中心なので、基本的にはある程度、くずし字を解読できなければ目録も作成できない。目録を作成できる程度の最低限のくずし字の読解というのが学生に課せられた課題である。平常授業の「古文学実習ⅠⅡ」では、通年での2年生への指導になるので、前年度での活字史料の読解などの歴史学の基礎的な土台もあり、やや指導が行き届くが、集中講義「古文書実習」では1・2年生合同の講義となるので、くずし字どころか、活字史料の読解もままならない1年生にも近世・近代史料を読ませることとなる。史料と目録だけ渡して「読んで目録を作成してください」では、学生は途方に暮れるので、グループ内で協力して相談しながら取り組ませるようにした。くずし字辞典を3名に1冊程度行き渡るように準備し、その使用法を教えた。近年では東京大学史料編纂所のデータベースの電子くずし字字典⁽¹⁾の使用も勧めており、学生にとってはこちらの方が使い勝手が良いようだ。その上で教員が巡回して読みの指導を行うというように、指導の体制を整えた。

目録作成が目的ではあるが、数をこなしてゆくのではなく、課題とし

⁽¹⁾ <https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

て提供された史料の読解に取り組みせることが真の目的であり、1点に数時間、1日かけても構わない。興味が深まってきたら釈文を作らせ、史料内容を理解できるよう促す。短期大学でもあり修得期間が短く、「読めるようになる」といった学修成果には必ずしも至らないが、通常の講義や卒論指導とは違った成果も得られたのではないかと思う。

ランダムに配布された史料に取り組み、その素材から歴史を読み取るという思考の仕方は、知識が一方向的に供給される講義や、特定の歴史事象を突き詰めてゆく卒業研究・論文の指導では得られない成果をあげたのではなかろうか。1文字、1文字の読解に取り組み、読めない文字を潰していきながら、史料の語るところを読み解いてゆく。たとえたんなる酒肴代の領収書であったとしても、百数十年前の人びとの営みをそこに見いだすことができる。ベテランの研究者でも、1年生の学生でもその感動に変わりなく、むしろ学生にとっては新鮮な喜びであろう。「古文書演習Ⅰ」と集中講義に学生がいかに積極的に集中して取り組んでくれたのか、それは塚田家資料目録の完成という成果に表れている。

学生の作業した目録をデータ化したところ、現段階で資料総数は1081点、年紀が明確な最古の資料が元禄12年(1699)正月28日⁽²⁾、新しいものが明治27年(1894)3月10日⁽³⁾、江戸期約100点、明治期約570点(うち明治10年まで約500点)を数える。

明治初期の資料が資料群の中核をなし、「古河藩御支配所 迫間田村名主 塚田幸助」⁽⁴⁾ 寒川郡第八大区三小区迫間田村用掛塚田幸助⁽⁵⁾ などとみえるように、この時期の塚田家当主であろう塚田幸助の村政にかかわっての資料が量的に充実している。近世から近代にかけて地域の指導者が、いかに近代的国家システムに携わっているのか、その辺りが具体化できそうである。

⁽²⁾ 「石川勘右衛門他二名口上書」(資料No.515)。資料Noは本文で言及した学生作成による目録の番号。現在のところ内容・精度は不十分であるが、いずれ公開できるようにしたい。

⁽³⁾ 「落合貫一郎・塚田峰三郎選挙当選報告書」(No.517)

⁽⁴⁾ No.340、明治4年「宗盲人別帳除籍願」

⁽⁵⁾ No.924、明治5年「仮御免状 御租税御請取証入」